ふかまちのまど　第二一号　九六年　一月一日

新春のご挨拶

深町町内会連合会長　小林德蔵

明けましておめでとうございます。旧年中はいろいろとお世話になりました。今年もよろしくお願いいたします。

わたしたちの町は、ここ数年来当局のご理解と皆さまのご協力によりまして著しい変貌を遂げてまいりました。特に道路と河川でみますと、学園橋・市道十六号線・綱掛川改良工事・県道太郎谷バイパスと年一年と姿を変えていってること、ご承知のとおりです。

昔から道路と河川の状態は、その地域の文化水準のバロメーターであると申しますが、この言葉はこの種の仕事の複雑さと遂行する上での困難さを指して言っているようです。

道路・河川の改良に伴う土地譲渡、建物立ち退きなどに際しての万人に共通する判断基準などありません。こんな中で事業が遂行されるのですから、文化水準のバロメーターと言われるのでしょうか。

新しい年における深町の変貌は道路では県道五十五号線改良工事（歩道設置）から始まります。旧年中、年末遅くまで、多くの関係者の方々が作業の推進に努力を続けてくださいました。正月が明けてからも作業が継続して進められるはずでございます。

深大池から農協までの該当の区間が歩道を備えた新企画の道に生まれ変わる日が一日も早いことを祈ってやみません。

ところで中国には『水を飲むときはまず井戸を掘った人に感謝せよ』という諺があるといいます。整備された新しい道を歩くとき、犠牲を払ってくださった方々、立場立場で骨を折って世話してくださった方々への感謝の念を忘れないことが大事です。

新しい年を迎え、道路・河川の改良にことよせて新春の所感を述べてまいりましたが、いうまでもなく深町の変貌は道路・河川だけにとどまらず、わたくしどもの生活全般にわたり意識の改革が要求されていることは間違いありません。

平成八年が平穏な年でありますように。深町町内会連合会がチームワークよくいっそう発展しますように。五穀豊穣、商売繁盛、家内安全も……。新しい年のたくさんの祈りをこめてわたくしのご挨拶といたします。▲▲

深の歴史（三）

― 地頭職石原氏と深 ―

高崎壽郎

深の歴史に颯爽と登場するのは石原氏である。

「応安二（一三六九）年足利三代将軍義満公より、備後国御調郡木頃庄地頭職に石原右衛門尉頼元が封ぜられ田屋城主となる。禄高一六〇九石也」と、深郷土誌にある。

木頃庄とは、深・中野・本郷・木門田の四村である。近隣をみると、東に木梨庄の杉原氏、西に桜山城主の桜山（山名氏、南は鳴滝城主宮地氏、北の八幡庄には地頭職渋川氏がいた。

文政二（一八一九）年の芸藩通誌の地図には、古城跡として、・深　堅山　綱出　・本郷　六谷山　森松出　・木門田　窪　門田をあげている。思うに石原氏は、医王山田屋城を居城に他を出城として一族郎党をあて、これを治めていたのではないだろうか。

石原氏が主に活躍するのは、室町・戦国時代である。

隣接する城主とのいざこざもあったようだ。有名なのは、本郷太平山城主木頃石見守経兼と吉和鳴滝城主宮地兵部小輔恒躬の争いで、応永三〇（一四二二）年秋、経兼の奇襲を受けて鳴滝城は落ち、恒躬は久山田の盛武紅岩で戦死。婦人は栗原の門田で捕われ殺された。一子明光は因島村上氏を頼み落ちのびる話は悲話として、今も語り継がれている。

石原氏がどのようにこの地を治めたか記録にないが、深に田屋城を築城すると併せて、一宇を建立して菩提寺とし「医王山正光寺」と号した。現在の藤下松秋誠治氏宅の東隣の田にあったといい、当時の汲井戸がある。その石垣の構造は現代の造り方とは全く相違している。又、村上山の山裾には苔むした宝篋印塔や五輪塔の古墓が多くあるが、松秋氏が墓守りをされる以外に訪れるものもない。

寺は後述のように、施主を失い荒廃したが、里人はこれを惜しんで小庵を結んだ。今の深町民会館のある場所で、「聖光庵」といい、会館ができるまでは中組公会堂と兼用されていた。尚、昭和二四（一九四九）年一月深田村役場を久山田よりここに移転し、昭和二六（一九五一）年四月からは三原市役所深町支所として、支所の建物が設置されるまで使用されていた。

いつの頃からか石原氏は、木梨杉原氏の家臣になり、毛利氏―杉原氏―石原氏という主従関係だったようだ。

慶長五（一六〇〇）年、天下分け目の関ケ原の合戦で、西軍に味方して破れた毛利氏は、周防・長門の二国に転封され、杉原氏、石原氏もこれに随伴した。

夏草や　兵どもが
ゆめの跡　芭蕉

とよまれ、石原氏は入府以来二三〇年間、この地に君臨した。

それ以後の深は、福島氏の時代は三原藩の郡奉行が支配し、浅野氏の時代は明治四（一八七一）年の藩廃置県まで、三原藩の直領となっていた。▲▲

「校舎と共に」（二）

― 旧・旧校舎で ―

石井哲代

深小学校校舎は鉄筋三階建てで、白亜の殿堂のような立派な校舎。広い運動場、そしてプール。

昭和二十四年、今からかれこれ五十年も前に学んだ者には、誠に誠に感慨無量なのです。

当時の校舎は平屋四教室へつづけて東側に、一教室を建て増しした五教室でした。その年今までの複式学級が解かれたので、六学年、六教室と職員室の七室に分けられておりました。

教室の廊下側の窓は増築された一室だけは硝子戸でした。廊下に続いて土間があり下駄箱もありました。障子には、指穴があっちこっちにありました。

一年生は建て増し教室を教類棚で仕切って、職員室のとなりでした。大本春臣校長さんは、常時執務しておられるので、毎日、毎時研究授業だった訳です。一年の教室の外側に時を報らせる鐘が下がっておりました。休みの鐘を打とうと、窓をガラガラッとあけると、講堂が中学校でした。その中学生が、ニコッとうれしそうな笑顔をみせてくれるのでした。

時報といえば午前十一時を村内へ報らせるサイレンも学校の仕事でした。

敗戦後の混乱した世の中、教育界も例にもれずでしたが、大本校長を中心に

「子どもに真の生きた力をつける」

「情操豊かな子ども」をめざして歩んだと思います。

自伸学習と名付けて、学年の枠を外し、各自は進度表をもって、自らの力を伸ばしていく学習の場をつくりました。音楽と算数と作文・詩だったでしょうか。

全員がオルガンを弾きました。楽譜をみながら弾きました。木琴も叩くレールを敷きました。

計算では、どの段階でつまづいているか、その点を指導することで自信になり、力を伸ばせるように仕組みました。

窓の白い便所汲み取紙はホッチキスで留めて、詩と作文ノートを各自で持ちました。常に持ち歩いて感じたこと、見たこと等、直ぐ書きとめる工夫でした。▲▲

いらっしゃいませ

☆岡本竹男様　十二月　東峠

お悔み申し上げます

★音石金子様　二月一六日　七二才

★北迫みつの様　二月二七日　八四才

一月町内行事予定

☆小学校

▼始業式　八日　▼参観日・二年遠足説明会　一九日

▼給食会　三〇日

☆幼稚園

▼新年初め　二日　▼参観日　一九日　▼誕生会　二四日

☆尚寿会

▼新年会　二五日

☆女性会

▼親睦会・上　二六日・中　六日・下　五日

▼定期総会　一四日

☆消防団

▼元旦会　一日　▼出初式　七日　▼機械器具点検　月内

☆町内会

▼上期総会　一四日　▼下とんど祭り　一四日　▼総会

（注）二日　下期総会　下旬

展望席

昨年は暗いことが多かった。阪神大震災。オーム犯罪が年初にあり、日本の安全神話は崩れた。お金にまつわる不祥事も大型化し、規格人の集団と思われた銀行が、なごやかな家庭的集団であることも知らされた▼官官接待もさらけ出た。接待以上にビックリしたのが空宴会や空出張だ。北海道一道一年で十億七千万円。これで刑法のお咎めなしとはどういうことか▼いじめで中学生が自殺した。決まって責められるのが教師だが、親・大人のかかわりあいももっと論じられてよい。いじめ一一〇番に留守番電話が設置してある由。もっと暖かい対応はできぬものか▼政界では東京都と大阪府にタレント知事誕生で既成政党顔色なし。政界の牛若丸こと山口議員は、橋の欄干ならぬ拘置所の塀に飛び上がった。さてどちらに落ちるか。▼明るい話題はイチロウとNOMO。文化勲章を断った杉村さんはどう評価すべきか。今年の色紙は誰に頼もうかと思案頓首